

中国社会科学学会 2012年度大会

会場：東京大学文学部1番・2番大教室（法文2号館2階）

主催：中国社会科学学会 Tel: 03-5841-3746, Fax: 03-5841-3744, E-mail: shabun@hyper.ocn.ne.jp

参加費（シンポジウム資料代）1,000円 非会員の来聴歓迎

2012年7月7日（土） 自由論題報告

第一会場（1番大教室） 13:00~17:00

司会：妹尾 達彦（中央大学）

南斉王融の政治クーデターの背後原因に関する考察 独孤 嬋覚（横浜国立大学大学院生）

コメンテーター：佐川 英治（東京大学）

「遼牀」について——李白「長干行二首」其一の解釈と旋回儀礼 山崎 藍（日本学術振興会特別研究員PD）

コメンテーター：狩野 雄（相模女子大学）

宋代先賢祭祀の理論 梅村 尚樹（東京大学大学院生）

コメンテーター：須江 隆（日本大学）

『咸淳臨安志』の位置——地方志制作を視座として 小二田 章（早稲田大学大学院生）

コメンテーター：須江 隆（日本大学）

陽明学・女性・聖人——良知説のパラドックス 陳 曉傑（関西大学大学院生）

コメンテーター：馬淵 昌也（学習院大学）

第二会場（2番大教室） 13:00~17:00

司会：白水 紀子（横浜国立大学）

清代地方官の女性観——公牘の分析を通して 五味 知子（学習院大学客員研究員）

コメンテーター：吉澤 誠一郎（東京大学）

『京話日報』から見る中華民国北京政府時代の北京旗人社会 阿部 由美子（東京大学大学院生）

コメンテーター：杉山 清彦（東京大学）

呉汝綸における異文化の選択的受容——その日本視察を中心に 土田 正（一橋大学大学院生）

コメンテーター：吉澤 誠一郎（東京大学）

蒙民厚生会の設立とその活動 娜荷芽（東京大学大学院生）

コメンテーター：杉山 清彦（東京大学）

抗戦期中国における地方新聞の保護と統制——浙江省戦時新聞学会機関誌『戦時記者』をめぐって 鈴木 航（一橋大学大学院生）

コメンテーター：中村 元哉（津田塾大学）

会員総会 17:00~17:30 1番大教室

2012年7月8日（日）

シンポジウム 東アジア古典教育のゆくえ

午前の部 10:00~12:15 1番大教室

日韓の漢字・漢文教育 金 文京（京都大学）

古典学的位置——東京大学古典講習科を起点として 齋藤 希史（東京大学）

コメンテーター：川原 秀城（東京大学）

司会：岸本 美緒（お茶の水女子大学）

懇親昼食会 12:15~13:30 2番大教室 [会費1,000円]

午後の部 パネルディスカッション 13:30~17:00 1番大教室

現代ベトナムにおける「漢字・漢文」教育の定位 岩月 純一（東京大学）

韓国のハングル古典教育 南 潤珍（東京外国語大学）

古典教育に対する研究の功罪 藤原 克己（東京大学）

二松学舎大学における日本漢文研究の取り組み 町 泉寿郎（二松学舎大学）

司会：村田 雄二郎（東京大学）

◇ 南斉王融の政治クーデターの背後原因に関する考察

独孤 嬋覚

〔報告要旨〕王融は南斉の有名な文学者である。竟陵王蕭子良に寵愛された「八友」の一人として、蕭子良文学集団の中でリーダー役を果たしていた。493 年、竟陵王蕭子良を皇位に就かせるクーデターに失敗し、牢獄で自殺した。吉川忠夫は「沈約の伝記とその生活」の中で、「竟陵王のまわりに雲集した「風流名士」や「学士輩」、そのなかの過激派たる王融が、いわゆる恩倖者を中心とする吏事派——たとえば劉係宗——の手中から政治権力をわが手によびもどそうとしたのがこのクーデターの「真因」（『東海大学文学部紀要』第 11 号、1968 年、37 頁）だと結論をだしたが、筆者は吉川氏の説と異なり、この謀反は名士派と吏事派との争いではなく、吏事派の後ろ盾の皇帝即ち齊武帝との権力闘争ではないかと考えている。これについて、1、王融の家系、2、齊武帝の家柄、3、齊武帝の人材政策、4、王融伝に見える「晩節大習騎馬」の政治的な意味の四点から考察を進めていきたいと思う。

〔報告者紹介〕独孤 嬋覚（どっこ せんかく）、1981 年生。専攻は六朝文学。中国華東師範大学中国語文学系卒。現在横浜国立大学大学院環境情報学府博士課程在学。主要論文『「詩品」は沈約の詩を中品に位置づける原因に関する一考察』（『江漢論壇』第 123 号、2005 年）、「再論「江郎才尽」——江淹の価値観をめぐって」（『横浜国立大学技術マネジメント研究』第 11 号、2012 年）など。

◇ 「遶牀」について——李白「長干行二首」其一の解釈と旋回儀礼

山崎 藍

〔報告要旨〕李白「長干行二首」其一は数多くの先行研究があり、なかでも第四句「遶牀弄青梅」の「牀」は様々な解釈が提起され、(一) ベッド、(二) 井げた、(三) 几案などの説がある。発表者は、第四句「青梅」を解釈するに際し、『詩経』「標有梅」を根拠に梅の実が男女の愛の象徴であるとする寛久美子氏と松浦友久氏の指摘に着目した。「青梅」が男女の愛の象徴となりえるならば、同じ句に詠まれる「遶牀」という行為にも、何かしらの民俗的意味合いが含まれているのではないだろうか。旋回儀礼に婚姻の意味合いがあるとする先行研究の指摘に加え、『酉陽雜俎』や史書などに、婚礼の際、ものの周囲をめぐる行為が記されているのは、その証左と言えよう。本発表では、めぐるという行為がもつ民俗学的意義を分析した上で、唐代の婚姻儀礼や、詩歌や小説における井牀の描かれ方などについて検討し、李白「長干行二首」其一をさらに深く理解することを目指す。

〔報告者紹介〕山崎藍（やまざき・あい）、1977 年生。専攻は中国古典文学。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学。現在日本学術振興会特別研究員 PD。主要論文「李賀「後園鑿井」考——六朝・唐代における井戸描写を通じて——」（『六朝学術学会報』11、2010 年）、「死者を悼んで旋回する——元稹「夢井」における「遶井」の意味——」（『東方学』123、2012 年）など。

◇ 宋代先賢祭祀の理論

梅村 尚樹

〔報告要旨〕宋代は各地に多くの祠廟が作られたが、道統の系譜を引く先賢の他、いわゆる郷賢と呼ばれるその土地独自の先賢が数多く祀られた。本報告では宋代においてこのような先賢祭祀をどのように正当化していたのか、主に経学的理解に基づいて検討する。『礼記』文王世子の解釈に見る郷賢祭祀正当化の理論はすでにエレン＝ネスカー氏が未刊の博士論文において指摘しているが、北宋末の『周礼』解釈史を考慮に入れていないため理解の不足が見られる。そもそも宋代の文脈においては孔子廟と学校がどのようにして不可分のものと認識されたのかから検討し直し、さらに南宋後期になると「郷先生」の概念も郷賢祭祀の根拠として用いられるようになる点、この「郷先生」の概念が特に廬陵（吉州）で特徴的に見られる点を指摘することで、総体としてなぜ学校の中に先賢を祀らなければならなかったのか、その理論展開の解明を試みる。

〔報告者紹介〕梅村尚樹（うめむら・なおき）、1982 年生。専攻は宋代史。現在、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在籍。論文「宋代地方官学の興起とその象徴——文翁・常袞の顕彰を手がかりに」（『史学雑誌』118-6、2009 年）、「宋代地方官の着任儀礼——官学との関わりを中心に」（『東洋学報』93-3、2011 年）。

◇ 『咸淳臨安志』の位置——地方志制作を視座として

小二田 章

〔報告要旨〕南宋末期の咸淳四年（1268）ごろに杭州で編まれた『咸淳臨安志』は記載の詳細さや体例の整備などで後世の地方志制作に大きな影響を与えた。筆者はこれまで、地方統治がどのように史料に書きとめられたのかという問題意識を持ち、主に杭州を対象として、地方志の「官績」の項目の分析を行ってきた。その中で、『咸淳臨安志』の史料的性質を把握することが宋代史研究において重要な課題であることを再認識した。今回、『咸淳臨安志』の制作過程、制作当時の杭州の状況、編者の潜説友について検討し、報告者がこれまで取り組んできた「官績」記載の分析成果と合わせて分析

する。以上の分析を通じ、『咸淳臨安志』がどのような時期的背景に基づいているのかを示し、南宋末期の地方志制作の意義の一端を明らかにできるだろう。

【報告者紹介】 小二田 章（こにた・あきら）、1979年生。専攻は宋代史。慶應義塾大学文学部卒。現在早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程在学。主要論文「北宋初期の地方統治と治績記述の形成——知杭州戚綸・胡則を例に」（『史観』第165冊、2011）、「方志と地域——杭州地域の歴代地方志「官績」項目を例に」（『史滴』第33号、2011）など。

◇ 陽明学・女性・聖人——良知説のパラドックス

陳 曉傑

【報告要旨】 「人はみな聖人になりうる」は陽明学のスローガンであり、「聖人」の条件も「良知に致す」次第であるものの、「女性は聖人になりうるか」という問題は言及されていない。そこで本発表は良知説・女性・儒学聖人論の間の葛藤を検討してみたい。

発表は二章に分ける。第一章は陽明学における「聖人観」の特徴を考察する。陽明学は宋学の「士大夫と皇帝と共に天下を治める」理想を諦観する傾向があるため、科挙に参加できない女性においても「聖人」になる可能性が開かれていたといえる。しかし、「すべてを自分の良知の判断にゆだねる」という陽明学の主張は、既に儒学理想の女性像（「三従」）と根本的矛盾がある。第二章では陽明後学が社会通念によって女性を評価する事実を紹介し、さらに極端派的李卓吾を例証として彼の女性観と儒学の言説の間に一致する点を分析する。そして、陽明学における「良知の判断によって既成規範を拒否する」態度の限界を示したい。

【報告者紹介】 陳曉傑（ちん・ぎょうけつ）、1981年生。中国哲学、江戸思想史専攻。復旦大学中国哲学専攻修士卒。現在関西大学文学研究科博士課程在学。主要論文「陽明学的『当下即是』精神」（修士学位論文）、「『場』論——論朱熹之『心』」（『九州学林』、掲載予定）、「中江藤樹の思想と信仰——『我』と『上帝』をめぐる」（『東アジア文化交渉研究』第4号、2011年）。

◆ 自由論題報告 第二会場（2番大教室）

7月7日（土）13:00～17:00

◇ 清代地方官の女性観——公牘の分析を通して

五味 知子

【報告要旨】 清代の地方官の主要な任務は裁判と徴税であるが、地方官と人々との関わりはそれに止まらない。公牘に含まれる告示や他の官僚への報告などの文書には、地方官が女性に関わる諸問題をどのように見ていたかが示されている。女性に関わる文章の多く含まれている公牘を複数選んで、いくつかのテーマについて検討していきたい。公牘の中に含まれる女性関連の記述には、大きく分けて五つのテーマがある。第一は溺女、第二は裁判、第三は風俗、第四はセクシュアリティ、第五は労働である。公牘中に描かれた女性像はあくまで地方官の目に映ったものであり、限界も多いが、検討する価値は高い。公牘という史料の性質に留意しながら、清代の地方官と女性の関わりを描き出したい。

【報告者紹介】 五味知子（ごみ・ともこ）、1980年生。専攻は明清女性史。慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程修了、博士（史学）。現在学習院大学客員研究員。主要論文「「貞節」が問われるとき——『問心一隅』に見る知県の裁判を中心に」（『中国女性史研究』17、2008）「近代中国の夫殺し冤罪事件とメディア——楊乃武と小白菜」（山本英史編『近代中国の地域像』山川出版社、2011）など。

◇ 吳汝綸における異文化の選択的受容——その日本視察を中心に

土田 正

【報告要旨】 吳汝綸（1840—1903）は曾國藩や李鴻章の上奏文の多くを執筆し、嚴復の翻訳論などに影響を与え、さらに京師大学堂総教習として中国の近代学制形成に果たした役割からすれば、先行研究は十分ではない。本報告の検討課題は次の二つである。第一は吳汝綸思想の史的な定位である。というのは、吳は言動や主張に矛盾が度々あり、先行研究回顧でも彼の思想は「維新運動」とは親和的でありながらも一定の距離があったなどと曖昧に結論づけられている。開明、保守の二元的把握を離れて、吳の思想的営為における時代状況を背景にした逡巡と個性を示したい。第二に吳汝綸思想における国民国家の創成、国民統合への問題関心（「国民団体」、「愛国心」）とそれらと日本との関係の究明である。吳汝綸が西洋文化の摂取とナショナルアイデンティティの両立のための手がかりを当時の日本の経験に求めようとしたことを1902年の日本教育視察を中心に跡づけたい。

【報告者紹介】 土田正（つちだ・しょう）1971年生。中国近代思想史専攻。明治大学商学部卒。筑波大学地域研究研究科修士課程を経て、一橋大学社会学研究科博士後期課程在籍。「初期鄭観応の思想——『易言』の改訂過程とその改革論を中心に」（『東アジア地域研究』13号、2006）、「通過日本有関梁漱溟研究而窺視其學術研究掠影」（『百色学院学报』20卷4期、2007）、「鄭観応思想における大同への志向とその帰結」（『現代中国』81号、2007）など。

◇ 『京話日報』から見る中華民国北京政府時代の北京旗人社会

阿部 由美子

〔報告要旨〕本報告は北京の白話新聞『京話日報』（刊行時期 1904—1923 年）の辛亥革命以降の記事を使用して中華民国北京政府時代の北京旗人社会を考察する。従来の辛亥革命以降の旗人研究は政府档案に依拠した制度研究が多く、旗人の社会実態の研究は資料の不足から十分にはなされていなかった。そこで報告者は『京話日報』に着目し、同紙の記事を通じて旗人の目線に立った社会分析を試みた。同紙は北京の生活に根差したローカルニュースを掲載する日刊紙であり、なかでも旗人関連記事を多く掲載し、旗人を読者層とする他紙には見られない特徴を持つ新聞であった。内容は旗餉の支給時期の通知、八旗衙門の人事、貧困救済、清室や王公の動向など多岐にわたっており、読者投稿にも旗人からの投稿が数多く掲載された。同紙の旗人関連記事を通じて辛亥革命以降の北京の旗人をとりまく社会実態、経済状況と彼らの抱いていた問題関心、主張、不満などを明らかにする。

〔報告者紹介〕阿部由美子（あべ・ゆみこ）、1980 年生。東京大学大学院総合文化研究科博士課程在学。専攻は中国近代史、特に近代満洲族史。主要論文に「張勳復辟と満蒙王公の反応」（『満洲史研究』6、2007）、「中華民国北京政府時期清室、宗室、八旗与民国政府的關係——以『清室優待条件』為中心」（『清代満漢關係研究』、2011、北京：社会科学文献出版社）など。

◇ 蒙民厚生会の設立とその活動

娜荷芽

〔報告要旨〕1930～1940 年代において、内モンゴルに財団法人蒙民厚生会が設立され、モンゴル人文化教育厚生事業の窓口となったことは知られ始めてはいるが、その活動自体はこれまでほとんど明らかにされてこなかった。蒙民厚生会は、その基盤をモンゴル人社会に置きながら、計画的かつ大規模な公益プロジェクトを展開した。本報告は、満洲国時代におけるモンゴル人に対する文化教育事業資金がどのように使われ、どのような結果に結びついたのか、この問題について蒙民厚生会に焦点をあて、その実態を考察するものである。まず、1930 年代後半から始まった満洲国におけるモンゴル文教機構の法人化問題について論じ、蒙民厚生会が設立された目的と経緯を考察する。次に、具体的に蒙民厚生会文教事業の展開について論じ、最後に、ほぼ同じ時期に設立された蒙民裕生会と蒙民振興会を取り上げ、その活動を明らかにすることとする。

〔報告者紹介〕娜荷芽（なひや）、専攻は東北アジア近現代史。東京大学大学院総合文化研究科において博士論文ファイナルコロシアムを行い、現在武蔵大学非常勤講師を務める。主要論文「内モンゴルにおける近代教育の研究の展開について」（『中国研究月報』64(8)、2010 年）、「満洲国におけるモンゴル人中等教育——興安学院を事例に——」（『日本モンゴル学会紀要』42、2012 年）など。

◇ 抗戦期中国における地方新聞の保護と統制——浙江省戦時新聞学会機関誌『戦時記者』をめぐる

鈴木 航

〔報告要旨〕民国時期を通して地方新聞の拡充・普及が新聞界の課題とされてきたが、抗戦期に入り沿岸大都市を軒並み占領された中国では、その実現はメディアの死活問題と認識される。浙江省では 1937 年 12 月、日本軍による省都・杭州占領のため、省政府機関とともにメディアは金華とその周辺への移転を余儀なくされた。最前線の領土防衛と抗戦宣伝に官民あげてとりくむ戦時浙江にとり、地方新聞は有力な抗戦の手段と考えられた。本報告は従来ほとんど使われていない戦時新聞学会（1938 年 4 月に浙江省金華に成立）発行『戦時記者』誌を主な史料とし、焦点化された地方政府による新聞事業への経済支援や制度改革及び動員のための調整のあり方を明らかにする。政府による地方新聞事業の保護と統制は表裏一体の関係で進行し、検閲など新聞の自由をめぐる議論を複雑化する背景となった。これはその後のメディア統制の在り方に影響を与えた点で重要な意義も持つ問題といえよう。

〔報告者紹介〕鈴木航（すずき・こう）、1976 年生。専攻は中国近現代ジャーナリズム史。信州大学人文学部卒。社会人経験を経て、現在は一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程在学。発表論文に「1940 年代中国の新聞界と言論・報道の自由——抗日戦争末期における「新聞自由化運動」をめぐる」、『信大史学』26、2001 年）。修士論文「1930 年代末期、中国の戦地記者——浙江省戦時新聞学会の研究」。

シンポジウム
東アジア古典教育のゆくえ
2012年7月8日(日) 10:00-17:00 1番大教室

企画の趣旨

古代漢語の読解力を基礎とする古典文献の研究・教育は、前近代以来の伝統の上にたち、東アジア諸地域の文系学問のなかで、独自の地位を占めてきた。しかし、近年の人文学をめぐる環境の変化とともに、その地位は急速にゆらいでいる。本シンポジウムでは、東アジア古典文献の研究・教育が東アジア諸地域の精神史及び文化交流に果たしてきた役割を改めて振り返るとともに、現在の東アジア諸地域の古典教育が直面している諸問題を検討しつつ、古典教育の新たな方向性をさぐってみたい。午前のセッションでは、金文京氏・齋藤希史氏に、歴史的背景もふまえて大局的な視角からの報告をお願いし、午後のパネルディスカッションでは、岩月純一氏、南潤珍氏、藤原克己氏、町泉寿郎氏に、ベトナム・韓国・日本における古典教育の現状・問題点を中心に、実践的な見地も加味して問題提起・討論を行っていただく。

本シンポジウムの題名にいう「東アジア古典教育」とは、必ずしも中国の古典漢文の伝統的な教育に限られるものではなく、中国以外の東アジア諸地域で作成されてきた漢文・非漢文の古典文献、及び近現代の東アジアの古典教育にも大きな影響を与えてきたヨーロッパの東洋学の方法、なども含めたものである。古典教育における中国文献と自国文献とのバランス、伝統的方法と近代的方法との関係などは、それぞれの地域における文化的自意識の問題とも密接にかかわり、人文学一般の在り方に及ぶ広い射程をもつ。諸地域の経験をふまえつつ、東アジア古典教育のあらたな方向性を展望することができれば幸いである。

報告要旨

午前の部 10:00-12:15

日韓の漢字・漢文教育

金 文京(京都大学)

現在、学校の一般教育の中で漢字・漢文を教えているのは、中国本土、台湾を除けば、日本と韓国だけである。日韓両国は、歴史的にも中国文化の受容において多くの共通性があり、それは現在の漢字・漢文教育にもある程度見られる。しかしその一方、両国の漢字・漢文教育には、日本が国語の一環であるのに対し、韓国はそうでないなど根本的な相違点も存在する。近年、日本では漢字ブームと言われる反面、社会一般の漢文の知識と関心は低下しており、中国学会や漢文教育学会など関連学界でも、このことは大きな問題として議論されている。21世紀の社会に教養としての漢文教育は果たして必要であろうか。もし必要であるとすれば、それはどのようなものが望ましいのであろうか。日韓の漢字・漢文教育の現状を比較することによって、この問題についての私見を述べてみたい。

古典学の位置——東京大学古典講習科を起点として

齋藤 希史(東京大学)

明治15年(1882)、東京大学文学部に古典講習科が設置されたことは、古典教育の近代にとって少なからぬ意味をもった。英語を中心とする当時の東京大学のカリキュラムとは異なり、この別科では伝統的な古典文献学の方法が重視されたが、それと同時に、近代日本における公的書記言語の継承と創造という実用面での役割も課されていた。そしてこれを踏み台として近代高等教育に組み込まれた古典学は、実用の学からの脱皮を図って国家の学と文化の学へと展開し、帝国大学体制における地位を確保していく。

本報告では、近代初頭における古典教育をめぐるこうした経緯を、近代日本特有の現象としてのみではなく、前近代も含めての漢字圏における古典教育の核心にかかわる問題として捉えなおす。それによって、古典教育が不可避免的に内包する課題を浮かび上げさせ、その未来がいかにありうるかを考える材料として提示したい。

現代ベトナムにおける「漢字・漢文」教育の定位

岩月 純一 (東京大学)

現在のベトナムの公教育制度は、フランス植民地政庁が設置し、ベトナム語ローマ字化の方向を決定づけた「仏越学校教育」の流れをくむものであり、さらにローマ字による識字を主要な目標として推進してきたため、その中で「漢字・漢文」の占める位置はきわめて小さい。民主共和国成立以降、漢字の理解能力を要する漢文古典は、人文学一般の専門教育からは切り離され、これとは独立した「漢喃(ハンノム)学(漢文・チュノム学)」で研究・教育されるようになった。ドイモイ以降、社会主義的な普遍理念にかわる文化統合の手段として伝統文化の見直しが進むにつれ、「漢字・漢文」、ひいては古典を理解する人材育成の必要性が意識されるようになってきているが、誰が、何を、どの範囲で知らなければならないのかについて、具体的な提言や議論はまだ展開されていない状況にある。こうしたベトナムの現状を、ほかの東アジア諸国との前提のずれに注意しつつ、報告する。

韓国のハングル古典教育

南 潤珍 (東京外国語大学)

韓国の古典文献としては表記の手段によって漢文および漢字で書かれたものとハングルで書かれたものがある。本報告では韓国の古典教育のうちハングル古典文献を対象とする中等学校教育に焦点を当てて以下の内容を概観する。1)ハングル古典の種類とその性格:漢文翻訳文献/創作ハングル文献の分類、内容による経典・実用文・文学作品の分類などの検討、2)古典教育の内容(1):文献を読み、その内容が理解できるように必要な言語史の知識の教授、3)古典教育の内容(2):文学史・文化史的意義の観点からの接近、4)学校教育における古典教育の現状とその位置づけ:1955年以来、韓国の学校教育の準拠として改定を重ねてきた「教育課程」における古典教育の取り扱い方、教育現場での古典教育の実態など。こうした現状の検討を踏まえ、ハングル古典教育の課題を1)人文学の社会的位置づけ、2)自己と他者の認識の観点から考察する。

古典教育に対する研究の功罪

藤原 克己 (東京大学)

この報告のタイトルはニーチェの『反時代的考察』第二章「生に対する歴史の功罪」をもじったもの。日本の高校・大学における古典教育は危機的状況にあるが、その責任の一端は研究者にもあると思う。今日の古典文学研究は、カントのいわゆる「用途を誤った勤勉さ」(『純粹理性批判』第1版序文)に安住してとめどなく細分化・拡散化が進む一方、私たちがこれまで「古典」と呼んできたものを「正典 canon」と呼び換え、特定の作品が正典化されてゆく過程に社会の権力構造や国民国家的イデオロギーを析出しようとするような動向もある。大学における古典研究は、たとえば高校教員や社会人のリカレント教育などにも貢献し得るようなものになっているであろうか。本報告ではまず教員免許状取得に関する現状から高校の古典教育の危機的状況についてふれ、ついで『源氏物語』や『徒然草』における中国文学受容のあり方について私の考えてきたことも織り交ぜながら古典教育に対する専門的学術研究の功罪について私見をのべてみたい。

二松学舎大学における日本漢文研究の取り組み

町 泉寿郎 (二松学舎大学)

二松学舎大学の21COE(日本漢文学研究の世界的拠点の構築2004~2009)では、中国研究のツールとして中国語教育が伸張する一方で「漢文」教育が衰退するなか、その歴史的意義に鑑み日本研究のツールとして「漢文」の重要性を訴えた。当初は日本漢文資料のデータベース構築を主眼としたが、中間評価時の指摘を踏まえて、海外の日本研究機関向けの漢文講座や、『論語』をテーマとした市民講座や高校への出張授業等に事業を拡大している。しかしながら大学内での「日本漢文」の教育研究体制は未熟な段階にあり、事業の一環として倉石武四郎『本邦における支那学の発達』の整理公刊等も行ったが、なお研究の対象・範囲が明確になっていないと言えない。欧米・東南アジアなど7カ国で実施した海外向け漢文講座では、欧州大学改革の動向や中国人留学生の伸張などさまざまな問題に直面し、その中には国内の「漢文」教育研究にフィードバックできるものがあると考えるので、各種の事例を報告したい。

シンポジウム報告者紹介

◇ 金文京 (きん・ぶんきょう)

京都大学人文科学研究所教授、韓国成均館大学東アジア学術院碩座教授。専門は中国近世戯曲・小説史。主著に『三国志演義の世界』(東方書店、2010年)、『漢文と東アジア——訓読の文化圏』(岩波新書、2010年)、論文に、「言語資源としての漢字・漢文」(『文学』第12巻第3号、2011年、岩波書店)、「中巖円月の中国体験——科举との関係を中心として」(『文学』第12巻第5号、2011年)などがある。

◇ 齋藤希史 (さいとう・まれし)

東京大学大学院総合文化研究科教授。専攻は中国古典文学。近年の研究テーマは、六朝詩の空間意識、東アジアの書記言語、近代東アジアの漢文脈。主な論著に、『漢文脈の近代』(名古屋大学出版会、2005年)、『漢文脈と近代日本』(日本放送出版協会、2007年)、『漢文スタイル』(羽鳥書店、2010年)、「悠然」の時空——陶淵明にいたるまで(『未名』28、2010年)、『虞美人草』——修辞の彼方(『叙説』38、2011年)等がある。

◇ 岩月純一 (いわつき・じゅんいち)

東京大学大学院総合文化研究科准教授。専攻は社会言語学、ベトナムを中心とする近代東アジア言語政策史。主な論文に、『ベトナム語意識』の形成と『漢字／漢文』:『南風雑誌』に見る(『東南アジア——歴史と文化——』24、1995年)、「ベトナムの『訓読』と日本の『訓読』:『漢文文化圏』の多様性」(中村春作ほか編『「訓読」論:東アジア漢文世界と日本語』勉誠出版、2008年)などがある。

◇ 南潤珍 (なむ・ゆんじん)

東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授。博士(文学)。専攻は韓国語学。近年の研究テーマは、現代韓国語の語彙文法・20世紀韓国語の通時論。主な論著に『現代韓国語の助詞に対する計量言語学的研究』(太学社、2000年、本文韓国語)、「現代韓国語の否定文使用の推移について」(『朝鮮語史研究』東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所、2009年、本文韓国語)、「表現能力に重点をおいた韓国語学習における対照語彙情報の活用」(『朝鮮半島のことばと社会』明石書店、2009年)等がある。

◇ 藤原克己 (ふじわら・かつみ)

東京大学文学部教授。専攻は平安朝の文学。主著は『菅原道真と平安朝漢文学』(東京大学出版会、2001年)、『菅原道真 詩人の運命』(ウェッジ選書、2002年)、『日本の古典——古代編』(放送大学教育振興会、2009年、共著)。また『源氏物語』の世界形成に中国文学がいかにか深く関わっているかということを論究してきたが、それは『源氏物語における〈愛〉と白氏文集』(日向一雅編『源氏物語と漢詩の世界——『白氏文集』を中心に——』青簡舎、2009年)にまとめた。

◇ 町泉寿郎 (まち・せんじゅろう)

二松学舎大学文学部准教授。専攻は日本漢文学(16~19世紀の儒学・医学)。共著・共編の著書として、『三島中洲の学芸とその生涯』(雄山閣出版、1999年)、『倉石武四郎講義 本邦における支那学の発達』(汲古書院、2007年)、『馬王堆出土文献訳注叢書 五十二病方』(東方書店、2007年)、『近代日本の仏教者』(慶大出版会、2010年)、『小野蘭山』(八坂書房、2010年)、『近代日中関係史人名辞典』(東京堂出版、2010年)、『清原宣賢漢籍抄翻印叢刊 大学聴塵』(汲古書院、2011年)等がある。